２０２１年８月１日聖霊降臨後第１０主日説教

出エジプト記 16 章 2-4 節、9-15 節
エフェソの信徒への手紙 4 章 17-25 節
ヨハネによる福音書 6 章 24-35 節

先週からオリンピックが始まっております。イエス様の十字架と復活を前提にして、現象を見てしまうせいでしょうか、オリンピックの競技についても、勝者よりも敗者に関心が行ってしまいます。人間的な思いですが、敗退しても試合後に勝者をたたえて握手したり抱擁したりと親しく交流する姿に、人と人との平和的な交流の可能性を感じます。

本日の旧約聖書は、有名なマナについての物語です。非常に有名でまた面白い個所でもありますので、本日は旧約日課を中心に学びたいと思います。聖書日課は、２節からですが、１節には、「**イスラエルの人々の共同体全体はエリムを出発し、エリムとシナイとの間にあるシンの荒れ野に向かった。それはエジプトの国を出た年の第二の月の十五日であった**」とあります。「シンの荒れ野」は、地図で見ますと支配半島の真ん中から少し下ぐらいです。続く、本日の２節に「**荒れ野に入ると、イスラエルの人々の共同体全体はモーセとアロンに向かって不平を述べ立てた**」とあります。１節と２節の間に、どれぐらいの時間が経過したかわかりませんが、モーセに率いられて、奴隷状態であったエジプトから脱出したイスラエルの民は、海沿いの比較的行動しやすい道、そしてその道沿いにある町エリムを離れて、非常に環境の厳しい荒野に入るとすぐに、不平を漏らし始めたようです。

彼らの不平の内容は、食べものについてです。「**イスラエルの人々は彼らに言った。『我々はエジプトの国で、主の手にかかって、死んだ方がましだった。あのときは肉のたくさん入った鍋の前に座り、パンを腹いっぱい食べられたのに。あなたたちは我々をこの荒れ野に連れ出し、この全会衆を飢え死にさせようとしている』**」（出エ 16：3）とります。イスラエルの人々は、心身ともにつらい状態であったエジプトでの生活から脱出して、約束の地に入るという希望を持って歩み始めたのでした。しかし、その希望がすぐに実現せず、また今がそれまでよりもつらい状態であると分かると、嘆いてしまうのです。しかも、具体的な例を挙げて、エジプトの方が良かったと嘆いています。『聖書』が、人間を徹底して美化しないで、表現している個所の一つと言えます。　ただし、エジプトからイスラエルに向かう道は、海側と通ったとしても、現代でも非常に厳しい道のりです。不平を言うのも当たり前かもしれません。理性的に判断すれば、その先にあるのは、希望ではなく滅びしかないからです。

さて、主なる神様は、そのようなイスラエルの不平を受けたモーセに対して、「**見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。わたしは、彼らがわたしの指示どおりにするかど**

うかを試す。」（出エ 16：4）と答えます。聖書日課は、４節で終わっていますが、５節には「**ただし、六日目に家に持ち帰ったものを整えれば、毎日集める分の二倍になっている**」（出エ 16：5）とあります。ここでは「パン」という言葉が用いられており、「マナ」いう言葉はまだありません（パンは、町の名前ベツレヘムのレヘムです。マナと名づけられるのは３１節です）。しかも、天からパンを降らせると語っています。また、６日目が量二倍とは、明らかに安息日を前提としています。十戒の授与より先に、安息日が前提となっているのは疑問に感じますが、ここではそれ以上立ち入りません。ここで大切なことは、主なる神様は、イスラエルの嘆く声に応えられたということ、もう一つはその応え方が、ただ不平を聞いて応えて単にパンを与えるのではなく、「わたしの指示通りにするかどうか試す」とある通り、民を試す意味があるということです。

これらのあと、パンが不思議な現象と共に降ってきます。「**見よ、荒れ野の地表を覆って薄くて壊れやすいものが大地の霜のように薄く残っていた。イスラエルの人々はそれを見て、これは一体何だろうと、口々に言った。彼らはそれが何であるか知らなかったからである。モーセは彼らに言った。『これこそ、主があなたたちに食物として与えられたパンである』**」（出エ 16：14-15）。

旧約日課は、ここで終わっていますが、そのあと民は、「**だれもそれを、翌朝まで残しておいてはならない**」と言われたにもかかわらず、何人かは残してしまい、それが腐ってモーセに怒られます。なぜ残してはいけないのかというと、毎日一人に必要な分、１オメルがきっちり与えられると決まっているからです。１オメルは、『聖書』巻末の度量表を見ますと、２．３リットルとあります。量だけは決して少なくはないと思います。食料としてのマナについて説明は、１６章３１節にあります。そこには「**イスラエルの家では、それをマナと名付けた。それは、コエンドロの種に似て白く、蜜の入ったウェファースのような味がした**」とありますので、何と比較していいのかわかりません。そもそも「マナ」という名前は、それを見た人の「**これは一体何だろう**」の「何（マー）」が語源と言われていますので、何これ？という食物なのでしょう。イスラエルの民の中に、天から降ってくるパンとは、どれほど美味しいパンだろうと想像していた子どもがいたとしたら、少しがっかりしたかもしれません。しかし、それは、仕方がないことです。このマナは、単に空腹を満たす食料ではなく、先に見た通りに、イスラエルの不満の声に応える主なる神様を、信頼し続けるかを試す意味もあったからです。

同じ出来事を記した申命記８章３節によれば「**主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった**」とあります。マナは、主なる神様がイスラエルを養い、そして導くことの象徴に他ならないのです。主なる神様が、試みると言ったのは、このことに関連していたのです。

本日の旧約日課が示している内容は、主なる神様と人間との関係です。言い

換えれば、主なる神様を信じるとはどういうことかを明らかにしています。それは、この箇所だけではなく、『聖書』全体が示している信仰のあり方にもつながります。そして、その信仰のあり方は、オリエント、ヘレニズム世界、そして日本など、『聖書』以外の神様との関係とは大きく異なっています。主なる神様を信じることとは、自分が困っているときに、願えば、自分の思い通りに聞いてくれる（かもしれない、であろう、であってほしい）お方を信じることではないからです。人間的には不可解であり、理不尽にも思えても、自分たちを導き、養い、最も良い方向へと導く方は、主なる神様のみであると信じることです。『聖書』が唯一の神を強調するのは、主なる神様がそのような方だからです。

しかし、他の宗教と異なるのはそこだけではありません。主なる神様とイスラエルとが人格的な対応をしていることです。聖書日課では省略されている個所ですが、そこには「**モーセは更に言った。『主は夕暮れに、あなたたちに肉を与えて食べさせ、朝にパンを与えて満腹にさせられる。主は、あなたたちが主に向かって述べた不平を、聞かれたからだ。一体、我々は何者なのか。あなたたちは我々に向かってではなく、実は、主に向かって不平を述べているのだ』**」とあります（出エ 16：8）。ここには、主なる神様とイスラエルの間にモーセが仲介者として存在していますが、主なる神様が、イスラエルの不満に耳を傾けて応えたこと示しています。イスラエルは、主なる神様を恐れながらも不満を述べて、主なる神様は、その声に応え、イスラエルは、自分たちの願いが聞き入れると再び歩み始めるという関係があるのです。『聖書』が示す主なる神様とイスラエルの関係とはそのような人格的に向き合う、そして、ともに歩むような側面があるのです。

しかし、人格的な関係といっても、いつも主なる神様がただただ聞き入れてくれるわけではありません。この１６章８節では暗示されているだけですが、不満が解消したはずのイスラエルは、すぐに再び不平を持ちます。そして、主なる神様がその声に応えるというお話が繰り返されます。そのお話は本日の「出エジプト記」ではなく「民数記」にあります。マナを食べ飽きて「**民に加わっていた雑多な他国人は飢えと渇きを訴え、イスラエルの人々も再び泣き言を言った。「誰か肉を食べさせてくれないものか。エジプトでは魚をただで食べていたし、きゅうりやメロン、葱や玉葱やにんにくが忘れられない。 今では、わたしたちの唾は干上がり、どこを見回してもマナばかりで、何もない**」（民 11：4-6）と、肉を求め始めるのです。そして、その時も、主なる神様は、イスラエルの不平に応えるのですが、疫病を持って民を撃たれます。理由は、詳しくは述べられていませんが、おそらくマナの時と同じように、人間的な思いから必要以上に集めたらからだと思います。非常に厳しい結果につながる場合もあるのです。

これらから示されることは、主なる神様と人間との厳しい関係・信仰のあり方です。それは、何を命じられても、忠実に従うことが信仰であるという面があります。しかし、そうはいっても、主なる神様は、イスラエルを愛しているので、その不満の声から出る要求にこたえてしまうところがあります。逆に、イスラ

エルの方は、要求が満たされても、さらにもっとと求めてしまうところがあります。主なる神様とイスラエルは、親と子の関係にたとえられることが多いのですが、それは、これらの関係からも正しい表現といえるでしょう。

本日の旧約日課が示している事柄は、教会に集められるわたしたちにとっても当てはまります。『聖書』の主なる神様を信じることにおいて大切なこと、それは人間的判断・理性をどのように用いることが正しいのかということです。約束の地に向かうとはいえ、現代ですら行動が困難な地域に、十分な準備もなしに進むことは、理性的に考えれば、まさに無謀な事柄です。そこを進めという指示に、ただただ何も考えずに従うことも大切かもしれませんが、問いかけることも大切です。それは、たとえその問いが、人間的な思いから出た不満であったとしても、主なる神様が応えて下さることにつながり、つまり、いつも主なる神様が導いてくださること、ともにいてくださることの確認につながるからです。『聖書』は、人間が理性をもっとも用いるべき行為は、主なる神様に問いかけること、そこにあると示していると思います。

わたしたちは、今、大きな不満の中にあると思います。わたしたちだけではなく、世界中の教会で、大きな不満があると思います。礼拝を今まで通りに行うことができないからです。また、聖書を学ぶ時間や、奉仕をする活動もできないからです。だからこそ、今、「出エジプト記」のイスラエルの人々のように、主なる神様に不平を言いましょうという表現は、適切ではないですが、主なる神様に問いかけることが大切であると思います。そのことを祈りで行うことが大切であると思います。今の状態が、いつまで続くのか、このあとどうなるかという不安を祈り続けることが大切であると思います。すぐに主なる神様からのお答えはないかもしれませんが、わたしたちがともにイエス様をそれぞれの場所で、それぞれの仕方で見続けるとき、必ず、わたしたちに最もふさわしい道が示されると思います。

「出エジプト記」の１６章３５節で「**イスラエルの人々は、人の住んでいる土地に着くまで四十年にわたってこのマナを食べた。すなわち、カナン地方の境に到着するまで彼らはこのマナを食べた**」と述べています。これが事実であるかどうかは別にして、最初にマナを喜んで食べた人たちは、それが４０年も続くとは思ってもいなかったと思います。しかも、４０年後に約束の地に入るのは、モーセも含めて最初の集団ではなく、次の世代の人々でした。そのような現象が、人間的な思いにおいて、納得できる事柄であったとは思えません。何のためにエジプトから出てきたのかと思えます。しかし、次の世代のよりよい未来を拓く事柄であったことは確かです。わたしたちの今の状態が４０年も続くことはないと思いますが、わたしたちが、祈りを通して主なる神様に問いかけ続けるとき、昨年からのわたしたちの歩みは、ほかの多くの教会と同じく、わたしたちの教会の、より良い未来につながると思います。そのことを命のパンであるイエス様を通して信じながら、公祷の礼拝再開・教会の諸活動再開を待ち望みたいと思います。